



ピザ

作・はゆも
絵・トキ

突然だが俺は魔法が使える。

魔法といっても空を飛んだり、火を起こしたりとかそんなものではない。

いや：勿論そういったことも出来るのだが敢えてそういう魔法は使わないと言った方がいいだろう。

俺はその手のタイプの魔法は好きではないのだ。

：何故って？ そんな魔法は古くさく、楽しくもないからだ。

俺の魔法の使い方はただ一つ。女に対して使い、自らの欲求を満たすためだけに使用する事。

男の魔法使いでこれをしてない奴は馬鹿だろう。もったいないとしか言いようがない。

そうだな：。例えばソフトな方向から行くと強制的に女を発情させる魔法から始まり、透明になり悪戯をする魔法、嫌がる女の動きを止め抵抗させないようにする魔法、そもそも嫌がることすらさせないように認識を変換させる催眠系の魔法などがある。

だが、俺はそんなぬるいものではなくとくに満足できなくなっていた。

そんな俺が多用するのは状態変化系の魔法。

元々は封印などに使われていた魔法であり、対象の体、その形や素材を変化させるタイプの魔法である。

：俺は気に入った女に変化の魔法を使い、物へと変化させるのが大好きなのである。

女を変化させ、日常品の代わりとして使うのが俺の楽しみ方であり、生き方。

それこそどんな物にでも変えられる。

衣類に変化させることだって出来るし、家具に変化させることだって出来る。

トイレットペーパーにすることだって出来るし、気持ちよく寝たい時には抱き枕に女を変化させふかふかの枕になった女を抱きしめながら寝たり、性処理したくなったときにはオナホールやラブドールに変化させてその穴の中に思う存分精を吐き出すこと出来る。

物へと変化した女は完全に俺の所有物であり、俺だけの「モノ」だ。
好き勝手に使っていいし、いらなくなったら捨てればいい。

そして人間の三大欲求である性欲、睡眠欲、そしてあともう一つ。

そう。食欲だ。当然最高の魔法である変化魔法がそれを満たしてくれないはずはない…。

女達を食品へと変化させて食べる。それも俺の日常だ。

女を素材とした食品はとにかく美味しいのだ。

少女を変化させると甘めの味になり、大人の女になると濃厚な味になりやすい。もちろん可愛い女ほど美味しかったりするのが最高なのだ。

とても女らしい味のそれを一度食べるとう二度と他の食べ物は食べられないほどである。

明るい顔で笑う少女たち、一生懸命に部活を頑張る女たち、恋人や彼氏、旦那と幸せそうにしている女たち、そんな風に楽しく過ごしている彼女たちは食品として最高の素材でありそんな彼女たちをただの食べ物として食べると心もお腹も非常に満たされる。

さて…今日もまた腹が減ってきた。

空腹を満たすため、いつものように俺は食べたい女を探しに街へと歩き出す…。

.....

いつものように素材を探しに街を歩いていると、向こうからゴスロリ衣装を着た小柄な女が歩いて来るのが見えた。

あれは確か近所の大きなお屋敷に住んでるお金持ちのお嬢様ふうちゃん…。

小柄で色白、ハーフで非常に整った顔立ち、可愛さと美しさを両方感じさせる、まるで作り物の人形のような女性。

長く綺麗な黒髪とフリフリのドレス衣装が相まって、日本人形の様でもあり、フランス人形の様でもある。やはりそれだけ美しく可愛い見た目なので、この近所でもあのお屋敷のぶらむお嬢様と言えぱちよとした有名人ではあった。そして、俺的に一番ポイントが高いのはおっぱいだ。ハーフな為なのかぶらむちゃんは小柄でもの凄く胸が大きい。ドレスを着ていてもわかるほどの大きさである。このおっぱいはもう色々と反則だよな。

：俺としたことがこんな最高の素材が近くに住んでいたことを忘れていたとは。一生の不覚である。

だが、まあいい。今ここで目の前にその最高の女がいるのだから。

今日はこのゴスロリお嬢様、ぶらむちゃんを昼飯代わりに食べちゃおう。



「やあ。こんにちは。」

「…？ こんにちは…？」

歩いてきたぶらむちゃんに挨拶すると無表情気味ながらも挨拶を返してくれた。

誰だろうこの人、というような怪訝な目つきでこちらを見てくる視線がなかなか悪くない。

「突然だけどぶらむちゃん。ちょっと俺に付き合ってくれないかな。」

「…。ごめんなさい…。急いでるから…。久しぶりにお外に出れたから行きたいところがあつて…。」

そう言いながら、ぶらむちゃんは止まっていた足を再び進めようとし始めた。

まあ知らない男にいきなりそんなこと言われたのだから、この結果は当然のことだろう。

だが、魔法の力を持つ俺の前ではそうはいかない。

『止まれ。』

「…っ？ え…？」

俺が止まれと言った瞬間、その言葉通りぶらむちゃんは動きを止めた。

ちょうど気をつけの体勢のようにおとなしく手をだらりと下げ俺の目の前で佇んでいる。

「いい子だねぶらむちゃん。」

「な、なんでっ？ 体っ…動かないっ…。」

くっ、と僅かに唇を噛むような表情を見せるぶらむちゃん。

「魔法だよ。ぶらむちゃんの体に動けなくなるような魔法をかけたのさ。」

「ま、魔法…?」

「まあ信じられないかもしれないだろうなあ。でも君は何にも知らなくていいんだよ。ぶちやん。ただおとなしくしてくれればそれでいいんだから。」

「やつ…、助けて…。やめてつ…。何もしないでつ…。」

これだけのやり取りでも身の危険を感じたのかぶらむちゃんは早くも弱々しい声をあげる。

か弱いお嬢様という感じでなかなかポイントが高い。

「大丈夫だよ。エッチなことはいらないからね。その代わり…ぶらむちゃんには食べ物になつてもらおうよ。」

「え…えつ…? 食べ物つて…。」

「魔法でね、今から体を美味しい食材に変化させちゃうからね。もちろん、食べ物になったぶらむちゃんは俺が欠片一つ残さず食べさせてもらうよ。あ…本当にぶらむちゃん美味しそうだ…見るだけで涎が…。」

「ぶ…ぶらむのこと、…食べる…の…? ぶらむつ…食べ物じゃ…ないよつ…! た、食べないでつ…!お願いっ…。」

おろおろとした顔で泣きそうになっているぶらむちゃん。
最高だ。可愛いよ。

こんな可愛く未来ある女が今から俺の為に空腹を満たすための食品になるんだ。

「さーて…ぶらむちゃん。『食材になれ。』」

「ま、まっつ…つ…。…………。」

その言葉と同時にぶらむちゃんの体がぼんつと煙に包まれる。

そして数瞬後、煙の中から現れたのはぶらむちゃんの形をしている「モノ」。

元々白めだった肌や、黒い髪、透き通るような色の瞳は全てただの白色の物体へと変わっていった。

それはもう、泣きそうな顔の女性の形でゴスロリ衣装に包まれたただの食材。

触ると粘土のように柔らかく、この食材が彼女だったということをはっきりと感じさせてくれる。

食材になった彼女へ鼻を近づけると彼女の匂いと食べ物のような食欲をそそる香りがする。

「いい匂いだね。食べ物になった気分はどうか、ぶらむちゃん。」

「...」

道に立つ彼女の形をした白っぽいモノはもう何の反応も見せることはなかった。

まあ、彼女の意識まではどうなってるのかはわからない。

まだ必死に助けを求めているかもしれない。しかし俺にはもう関係のないことだ。

「今すぐに食べちゃいたいけど...ここはゆっくり出来ないし家に持って帰って食べるとするか...可愛い女1人お持ち帰りつと！」

食材になったぶらむちゃんを抱きかかえる。

気に入った女をテイクアウトすることに成功した俺は満足しながら家へと足向け始めた。

.....

「よいしょっと。さてと…準備を始めるか。」

家に着いた俺は抱きかかえていたぶらむちゃんを厨房へと連れて行き、テーブルの上に載せる。

この厨房は自分で言うのも何だがなかなか設備が良く、大体の料理は作れるようになっている。

そんな所にぶらむちゃんを連れてきた理由はただ一つに決まっているよな。

「今日はピザを食べたい気分だったんだ。だからぶらむちゃんにはその生地になるためにこんな体になつてもらったんだよ。」

「……。」

当然のようにテーブルの上の彼女は言葉を返してこない。

これは俺の調理するときの楽しみなのだ。素材の女に好き勝手なことを言いながら調理していく。

「ゴスロリお嬢様のぶらむちゃんを今からたくさん捏ねて食べやすい形にするからね。巨乳女をピザにしたらどんな味がするのか楽しみだぜ。まずはそのゴスロリドレスを脱ぎ脱ぎさせてあげるからね！　そう…ぶらむちゃんのおっぱい…！　大きなおっぱい見せて！　ぶらむちゃん！」

テーブルに横たわるぶらむちゃんのドレスをずると脱がしていく。

粘土みたいな柔らかい体を触り、万歳のポーズをさせてぶらむちゃんの白い体を包むドレスをすぼんと取り去った。

「白と黒のゴスロリドレス…ぶらむちゃんによく似合ってたね。びりびり破って裸にしてあげてもよかったけど、このドレスはまだ後で使わせてもらおうよ。しっかし…！　それに

してもこの年にしてこの胸はすごいな…。デカバイすぎるぞ！」

ドレスを脱がして露わになったのぶらむちゃんの体。ひらひらとしたフリル付きの薄い布ブラと、パンツではなく可愛いワンポイントボンの付いたドロワーズを身に付けた食材ぶらむちゃんは小柄なのに健康的にふっくらとしていて美味しそうだ。

何より素晴らしいのはこのおっぱい。細い体には似合わないほどに大きく育った丰满な2つの膨らみは、脱がしてみてもがっかりさせない程の巨乳だった。やはり普段からいいものを食べているお嬢様だからこそこんなによくおっぱいも育つのだろうか。

そしてそんな大きく育った女の2つの膨らみ、おっぱいをこれから収穫して食べるのはこの俺だ。

女のおっぱいというのは食べるととても女そのものの味がして非常に癖になる美味しさなのだ。

可愛い女のおっぱいならなおさらである。

「お尻は小さめで可愛いね。ちょこんとした甘そうなお尻だ。そしてぶらむちゃんの大切なところ…おまんこは…まだびったり閉じてるんだね。未使用な感じでいやらしさも感じない綺麗なおまんこだな。…おまんこ未使用のまま俺のご飯になっちゃうんだなあぶらむちゃんは…。」

ドロワーズを脱がせ、露わになった女の下半身を目にして俺はそんな感想を漏らす。

お尻はおっぱいとは違い、ちっちゃめで彼女らしい尻だった。剥き立てのゆで卵のようにぷりんとしていて思わず頬擦りしたくなる。

そして、まだ未熟さも残しながらもぶにぶにと柔らかそうでもあり、女であることもアピールし始めている年頃のおまんこ。

匂いを嗅ぐと女の匂いと共に、少しだけおしっここの匂いもする。それがまた女の味がしていいのだ。

女の一番大切なところでもあり、食材としてもとても大事な部分である。

食品加工する際に穴として空いているおまんこは色々使い道がある。

例えば歩きながらも食べられる手軽なサイズの食べ物にするときなんかにはおまんこに棒や串を刺し、持ちやすくしたり…。

クリームパンや餃子、女のお腹の中にぎゅうぎゅうと具を詰め込んで食べるときにはおまんこの中に押し込んだり注入して入れたり…。

もちろんぶにぶにの膾肉は味自体もとても女そのもので美味しいし、柔らかくてとろけるような部分だ。

「でもやっぱり一番はこのおっぱいだよねあ！　ぶらむちゃん、ロリロリしてる癖にドレスの中にこんなに大きなおっぱい隠しもってたんだもんね。乳首も小さめで柔らかそうだし一番美味しいタイプのおっぱいだなこれは。もちもちおっぱいの味はどんなもんな。」

おっぱいを包んでいたブラを剥ぎ取り、いよいよ目の前に登場した2つの大きな膨らみを見てため息を漏らす。魔法で食品にさえなっていなければぶるぶると豊かな果実の如く震えていただろうおっぱい。

今やその2つの乳は栄養満点の健康食品に過ぎない。

おっぱいにも色々なタイプがある。同じおっぱいでも胸自体の柔らかさや乳首の形、大きさによって味まで変わってくる。

もちろん個人差も相当あるが、大きいほど食べたときにとろけるような感触がしたり乳製品系の味がすることが多い。

基本的には巨乳の女のおっぱいの方が美味しいというのが俺の結論だ。

今まで何個のおっぱいを食べてきたのかも数えてもないけどな…。

「ぶらむちゃんのおっぱいは哺乳瓶タイプの甘えさせてくれそうないおっぱいだね。まだ小さいのにこんな男を誘惑するおっぱいを持つてなんて悪いお嬢様だ。そんな巨乳お嬢様は食べられちゃっても仕方ないよねあ？」

ぶらむちゃんはそんなことを言われても反応もせず、ニーソックス以外他は一条纏わず裸になってテーブルの上で横になっている。

まるで早くぶらむのこと食べて☆と食べられるのを待ちわびているかのようにも見える。

「ニーソ脱ぎ脱ぎさせたらそろそろぶらむちゃんこねこねしてあげるからね。…このニーソ…チンポ包むのにも使えそうだな…。」

などと考えながら脱がしていき、ぶらむちゃんはとうとう何も身につけるものもない状態となった。

俺はそんなぶらむちゃんの体を軽く触り、その感触を確かめるようになで回す。

「見事に柔らかい体になってるね。さて、どうやってビザの形にしていくかな…。…押しつぶすようにまず平らにして…。」

俺は頭の中でぶらむちゃんを調理していく構想を練っていく。

そして、その通りにぶらむちゃんの体をこね始めた。

柔らかくなったその体を触っているだけでとても気持ちがいい。粘土のように柔らかく、そしてほんのりと暖かくいい匂いがある。

人の形をしていた女をどんとビザの丸い形へと変えていく。

だが、せっかくの可愛い女だ。

その可愛さも残しておいてあげる気配りを俺は忘れない。

お尻の形やおまんこの形はちゃんと残しておいてあげる。その方がぶらむちゃんを食べる感じがより強くなって美味しく食べられるからね。

出来上がりの味やその姿を想像して俺は1人興奮する。

そのままの勢いで手を動かし、べったんべったんもちむにむにとぶらむちゃんの体を撫でてこねて力を入れ、食べやすい大きさに変化させていった。

「デカパイお嬢様味のロリ巨乳ピザ一丁あがりつと。あとは焼き上げるだけだな。」

テーブルの上にはこのまま食べても美味そうな匂いの柔らかそうな生地の塊が載っている。

さっきまで女であった面影も残っているのにすっかり食べ物しか見えなくなっているぶらむちゃん。まさに食材だ。

手足は体にくっつけるように力を込めてこね、お腹はその手足の分ならかに盛り上がっている。

全体的に女の特徴のある部分はそのまま残し、それ以外は平らに伸ばし円形の生地状にこねまわした感じだ。

ほとんどこねていないぶらむちゃんのすじのおまんこやおへそ、泣きそうな表情のぶらむちゃんの顔が生地の上に浮かび上がっている。それはまるでレリーフのようだった。

大きなおっぱいはこねこねと少し触りすぎたせいでべたつと僅かに潰れているがそれでもまだとても目立つ膨らみを残している。

でもただ揉んだだけではない。撫で撫でしながらぶらむちゃんのおっぱいはチーズにしておあげた。

ぶよぶよなチーズになっているおっぱいをくんくんともの凄い乳製品系の匂いがする。まだ小さくても流石に女。おっぱいはもうちゃんとミルク味になっている。処女の女がお乳の中で溜め込んだミルク風の味と香りは最高の食材だ。

オープンにしたらきつとおっぱいチーズが自らの体にとろけていき、さぞ美味しいピザになることだろう。

「それじゃあぶらむちゃん。また後でね。しっかりオープンの中で美味しいピザになるんだよ。」

ピザ生地になったぶらむちゃんをお皿に載せ、オープンの中に入れる。

女を調理する為の大きな特製オーブンのスイッチを俺は躊躇うことなく押した。

オーブンの中で次第に熱せられていく。ぶらむちゃん。

「この出来上がるまでの時間がいいんだよなあ。ただの食材になった可愛い女が、俺に食べられるための料理になっていく瞬間が……！」

まだまだ人生これからの育ち盛りの女が完全にただの食べ物になる。

食べ物というのは食べられるためにあるものだ。空腹を満たし、食べた人間の栄養となる為のもの。

もしもこれがよくある話だったら……悪い男に食べられそうになっている女の大ピンチに正義の魔法少女やらが助けにでも来てくれて悪い男を倒し、間一髪少女は助けられて元に戻り、ハッピーエンドにでもなるだろう。

だが現実はどうはいかない。ぶらむちゃんはそのまま美味しいピザとして焼き上がり、食卓に並ぶ。

このデカパイお嬢様は絶対に食べる。もう逃がさない。もしも誰かが助けに来ててもその時はぶらむちゃんはもう俺のお腹の中にいることだろう。

一度魔法で食品にしてしまうと当然元には戻せないし、食べてしまったら胃袋の中で消化されてしまうことになる。

1人の未来ある女にそんなことをしてしまうのは少し可愛そうかなとも思う。

しかし女を食べることは止められない。なにせさっきまで女だったこの食べ物は女らしく甘い匂い、柔らかくすべすべもちもちとした食感、そして少しエッチな女そのものの味がするのだ。

一度女を食べてその味を知ってしまうと病みつきになってしまう。

「女達はみんな嫌がついてもちちゃんと美味しい食べ物になってくれるもんなあ。体は正直だよな。美味しくなかったらこんなことしないんだけど、普通の食べ物と比べて女が美味すぎるのが駄目なんだよな。本当に食べられるために生まれてきてるとしか思えない

ぜ。」

このデカパイのゴスロリお嬢様ぶらむちゃんも泣きそうな顔で嫌がっていたのに、もうとても美味しそうな匂いをオープンの中から部屋中に撒き散らし始めている。

それはとても食欲をそそる匂いであり、こんな美味しそうな匂いがする物を食べないという選択肢は絶対に出てこないだろう。

「ぶらむちゃんのミルクとチーズ臭のする大きなおっぱい早く食べたいな！　ちっちゃくてすべすべこねこねしすぎて平らになっちゃったお尻も：ピザの耳に一筋切れ目のように残ってるぶにぶにロリすじおまんこも：妊娠したみたいに膨らんでる柔らかぽんぽんも：可愛くて上品なお嬢様らしいぶらむちゃんのほっぺたも：丸ごと残さず全部食べてあげるからね！」

俺はテーブルの上をセッティングしつつ、ぶらむちゃんをもうすぐ食べられるという喜びに震えていた。

チン！

そうして待ちわびていた音がした。焼き上がり完了、おっぱいピザ出来たての合図の音だ。

俺はすぐにオープンの蓋を開けると…。

「こりやすげえな…！　めちゃくちゃ美味そうだ…この匂い！　ぶらむちゃんのチーズおっぱいの匂いが胃袋刺激しまくってくるよ！」



オープンから取り出した皿の上にはほかほかと湯気を立てる食品がある。

ぶらむちゃん…というのももうおかしいな。うん。もうこれはただのピザだ。どこからどう見ても女の形をしたただのピザだよな。

あんなに白く、粘土のようだった生地になっていた体はこんがりと目焼けしたように焼け、ぷにぷにとしていた大きな2つのおっぱいはチーズとなってべったりと潰れ、生地となった体の表面を包むように満遍なくとろけている。

かなり全体的に平らになったべったんと潰れた円形になったぶらむちゃん。そんな中でも大きくもつちりと膨らんだお腹。そこにもたつぷりとおっぱいチーズがトッピングされ、本当にその全てが食べ物になっているのだ。

ちゃんとピザの耳はかりかりとしていそうで焼き加減も抜群だろう。ピザ耳に一筋入ったぶにぶにまんこもカリカリもふもふな感じに焼き上がっている。

これは…どこから食べるか本当に迷うような贅沢なピザになってくれているな。

テーブルの上に敷いていたゴスロリドレス。ぶらむちゃんが着ていたそのドレスの上に出来たてのピザを載せる。

大好きだったゴスロリ衣装の上で食べられるのだからぶらむちゃんもきつと嬉しいだろう。

そして取り皿代わりにぶらむちゃんの布ブラ、お手ふきや口拭き用のお絞り代わりにぶらむちゃんの履いていたドロワーズを使わせて貰うことにする。

食べ方は…そうだな。ここは少しずつ切り分けて食べていくことにしよう。

ピザを切り分けるカッターを使い、適当な食べやすい大きさにしていく。切り分けていく中で感じるのとはにかくむにむにと柔らかくふわふわとした感触、とても言おうか。切り分けるというそんな作業ですら食べたときの柔らかさを想像させてくれて非常に楽しい。

「よし！それじゃあぶらむちゃん！おっぱいピザになってくれたぶらむちゃん食べちゃうね！いただきます！」

まずは…端っこから行くか。俺は三角形にカットしたピザの一片を手に取り、皿代わりのぶらむちゃんの布ブラの中にピザを入れる。すると、とろっとチーズになって溶けたおっぱいがブラに引っ付いた。

さっきまで形良く包まれていたブラの中にチーズになって帰ってきたおっぱいはとても美味しそうでいやらしい匂いである。

「おっ…ここはぶらむちゃんのぶにおまんこの辺りかな。ピザの耳に可愛いすじが入ってるなあ。すっきりカリカリになっちゃって。どんな匂いになってるかな…。ん…なかなか香ばしく焼けていてチーズの匂いがぶんぶんするな。おっぱいチーズのせいかな…それ

ともち…。」

などといいながら、とにかく食べてみることにする。

たつぷりとチーズの載った生地を口の中へと運んでいくと、どんどんとピザの匂い、そしてぶらむちゃんのおっぱいの匂いを強く感じる…。

「んっ…もぐもぐ…。…………。はあ…やっぱりぶらむちゃんのことピザにして正解だった…！　ぶらむちゃん美味すぎ…。もぐもぐ…。」

1 人感想を述べながらもピザを咀嚼するその口は止まらない。

信じられない美味さだ。とんでもなくもっちりとした生地の上に濃厚な女の乳の味をしたチーズが惜しげもなく載せられ、それをまとめて口の中で混ぜあい味わうことが出来る。こんな幸せはなかなかないだろう。

食べたところがおまんこの辺りだったためか、比較的生地も濃いめの味がする。

でもそれはとてもまろやかな味で甘みすら感じるほどの不思議な味だ。これこそ女の味。ぶらむちゃんの味だ。

「ぶらむちゃんの未使用おまんこもピザになっちゃってるねえっ！　入り口はカリカリサクサクしてお菓子みたいでっ…！　その奥はこれでもかっけくらいにふわふわ柔らかくてちよつと甘さすら感じる味だね！　おっぱいチーズとすっごい良く合う最高の組み合わせだねえ。」

くにゆくにゆサクサクとビザらしくもあり女らしい食感の、手に持った一切れをあつという間に食べてしまった。

一番最初に一番美味しいところを食べてしまったかなあと少し後悔したが、続いて大きく膨らんだお腹の辺りを何等分かに切り分けて食べてみるとそんなことはないということを感じ知らされた。

「うおっ…お腹もまたいい味だしてるな。手足もまとめてくっつけてこねこねしたせいかな。かなりポリウムのある味だな。まだ小さいからだろうなあ。混じりっけのない純粹な味だね。ぶらむちゃんの女らしい匂いと食べ物の美味しそうな匂いが口の中に染みこんでくるなあ…。ぶらむちゃんのデカパイ…本当にチーズ用の最高のおっぱいだな…。吸うように舐めてもべろべろしても噛み噛みしても優しくとろけるチーズおっぱいだ…」

手に持ったピザを口に運ぶ度にもの凄くいい匂いが鼻腔に流れ込んでくるのだ。性欲と食欲を刺激する魔性の匂いとも言える。

まるでロリ妊婦のように膨らんだもちもふわふわぶらむちゃんは切り分ける度に柔らかくむにゅーっと伸び、たっぷりと載せられたおっぱいチーズも一緒に糸を引くようにとろけて伸びる。

そして、口の中でまったくゆくにゅと伸びたり噛まれたりして俺の唾液と混ざり合い、何度も何度も舌で舐められた後に食堂の奥へと落ちていく。

その先の胃袋は最高のご馳走に大喜びだ。もう手が止まらない。ばくばくと次々に小さく切り分けたぶらむピザを口の中へと放り込んでいく。じつくりと味わうのと同時にたっぷりと腹が膨れるまで食べる。本当に最高のご馳走だ。

口の中と手にぶらむちゃんのおっぱいチーズの匂いがこびり付いている。ぶらむちゃんのドロワーズで口を拭きながら、噛まれていやらしく口の中で音を立てるピザ。

次第にそれはただの食事となっていく、これが女であることも忘れるほどに夢中で食べていた。

「ふうっ…。いやあ…食った食った！」

そうして気がつくと、テーブルの上に敷かれたドレスの上には僅かに散乱したピザ耳の欠片だけが散らばるだけになっていた。

「まさか一気に全部食べちゃえるとは思わなかったな…。小柄でロリな女とはいえ丸ごとべろりと食べるのは結構大変だから…。さすがロリ巨乳な美少女は違うね。女のおっぱいは本当に美味しいけどぶらむちゃんのおっぱいはその中でもかなりの高級食材って感じだったよ。」

こんなに美味しい女は久しぶりだったかな。俺は大きく膨らんだ腹を撫でながら、満足してソファーに座る。

「この中にゴスロリデカパイのぶらむちゃんがいるんだもん…。今どんな気持ちかな…。家に帰りがつてくるかなあ？ …まあ心配しなくても、すぐにそのうち出てこられると思うよ。あ…。でもどうだろうな。ぶらむちゃんかなり可愛くておっぱい大きかったからもしかしたら俺の体がぶらむちゃんのこと気に入って全部栄養か精液にしちゃうかもしれないけど…。ま、いいか。」

もしも精液にでもなったらぶらむちゃんの履いていた衣服をティッシュ代わりにして、着ていた衣服に染みこむようにぶちまけてあげよう。

ぶらむちゃん、俺は今から少し寝るけどぶらむちゃんはお腹の中でゆっくりとしていてね。

胃袋の中でもぶらむちゃんの匂いが染みつくくらいにじっくり味わわれて欲しい。

まだまだぶらむちゃんは食べ物だけれど食べ物ですらなくなり、別のモノになるまで。

俺は食べ物になった女は大切に味わい決して残すことのない優しい男なのだ。

「さて…食ったし少し寝るか…。晩飯は…少しあつさり系にべたんこおっぱいの女にでもするかな…。」

脈打つように活発に動き膨らんでいる腹を横に向けながら、俺は目を閉じていく。

楽しい昼食の時間は終わった。